

歌子先生へ感謝を込めて ——あるいは、クスクスとワインとシトロエン

外国語学部長
外国語教育学研究科長
竹内 理

我々の敬愛する菊地歌子先生が、この3月31日をもってご退職になられる。また一人、外国語学部を体現するような先生と、同僚としてのお別れをせねばならない。悲しい気分ではいっばいである。歌子先生は、フランス政府の給付留学生（朝日新聞社主催仏語スピーチコンテスト優勝の副賞とのこと）として、モンペリエ大学に学ばれ DEUG（一般教養教育課程）を終えられたのち、ストラスブール大学文学部において言語学・音声学の専門課程と修士課程を修められ、DEA（博士論文準備資格）を取得。その後、同大学より、「日本人学生を対象としたフランス語発音教育における音声学的知見の応用」というテーマで、博士号を取得された。以後、一貫して、フランス語発音教育・研究に情熱を燃やされている。

歌子先生は、研究者・教育者としてのお顔の他に、会議通訳者としてのお顔があり、そのレベルは超A級、国内外でも最高峰の腕前とお聞きしている。政治家や政府高官、世界的学者や文化人の講演・対談等の通訳をされているほか、その経験を生かして外務省の研修講座やNHKラジオで仏語講座を担当されるなど、活躍は止まることを知らない。その片鱗は浅学の私でも伝え聞いてはいたものの、今回、この原稿を書くにあたり、ごく簡単にウェブで調べてみたが、先生の通訳分野の業績が次々にヒットする。なんとも偉大な通訳者と同僚として勤務していたのだ、と改めて認識した次第である。

しかし私個人にとっては、歌子先生は、クスクスとワインとシトロエンに体現されるおしゃれな女性のイメージなのだ。北アフリカのマグリブ地域発祥の粉モノであるクスクスは、この地域の旧宗主国がフランスであった関係で、広くフランスで食せられているそうだが、歌子先生といえは、クスクスというイメージがとても強い。ご自宅でこの料理を振る舞われているお姿は、多くの同僚教員たちの心に残っていることだろう。

ワインも先生を表すキーワードといえる。為春会の宴では、ワインを片手に、ほんのりと頬

を赤らめている先生の周りに、常に人が絶えなかった。私もいろいろとフランス・ワインについてのお話を聞かせて頂いた一人だ（実は、私は Barolo などに代表されるイタリア・ワインのファンなのだが）。そして、シトロエンの SUV。あの車は乗る人を選ぶ。歌子先生は、その選ばれた人なのだ。そうそう、お母様のお話もよく聞かせて頂いた。先生が名誉教授になられたことを、ご高齢のお母様が一番喜ばれたとのこと。「親孝行ができました」と私におっしゃられたときは、目頭が熱くなる思いだった。本当に思い出が尽きない。

歌子先生、足かけ20年余りの関西大学生生活、お疲れ様でした。どうか健康に留意して、いつまでもクスクスとワインとシトロエンが似合う人でいてくださいね。先生ほどフランス的な薫りがする人はそういないのですから。